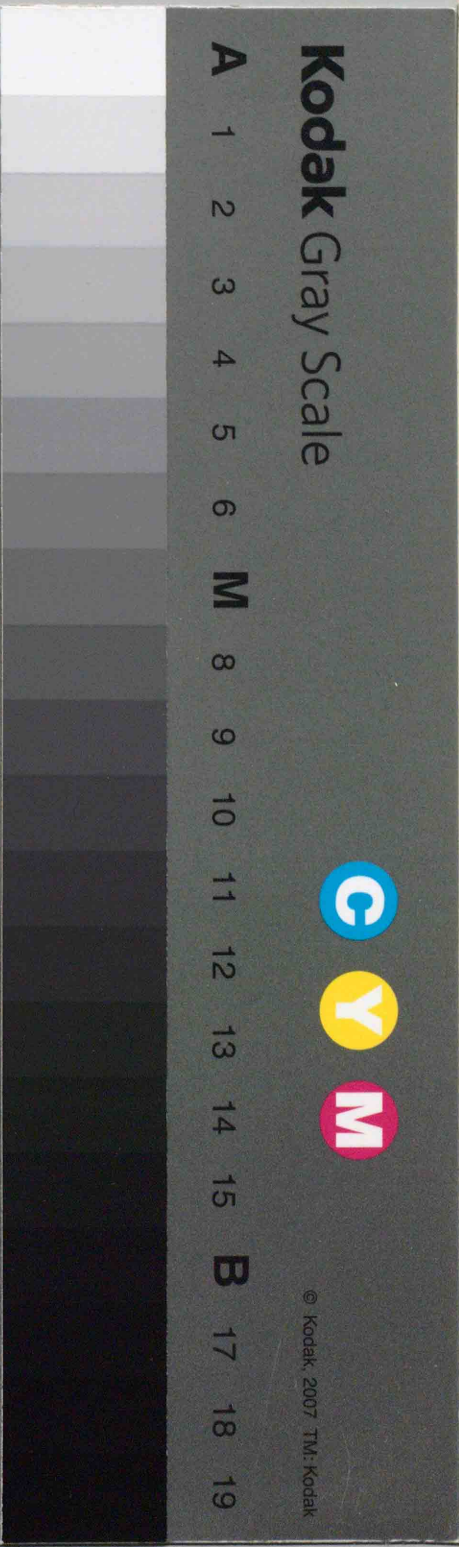
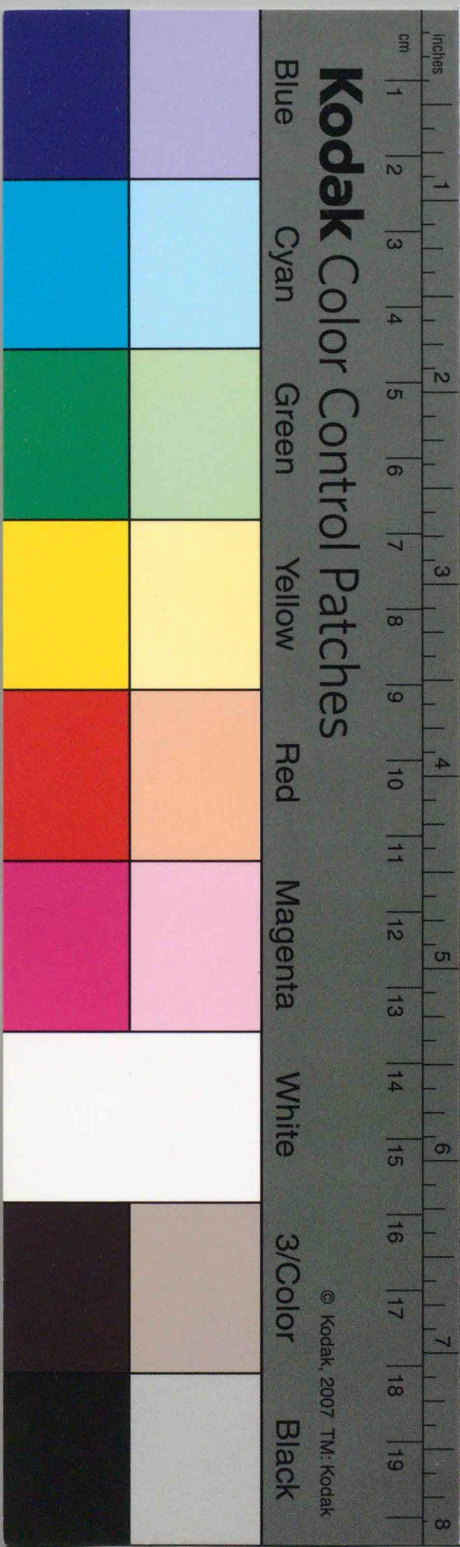


375.9
M.14
資料室

教科
31-
2000



41391

教科書文庫

4
810
31-1935
2000 301865



教科書文庫

4

810

31-1935

2000301865

資料室

395.9
May



小學國語讀本 卷三

文部省



尋常科用



広島大学図書

2000301865



たが にごど もの とさ

もくろく

一	春が来た	一	十三	牛若丸	四十一
二	なはとび	四	十四	とんぼ	四十六
三	うさぎ	六	十五	一寸ボフシ	四十八
四	とび	八	十六	かちく山	六十一
五	しりとり	十	十七	ねずみのちゑ	六十九
六	ひよこ	十三	十八	キンギョ	七十二
七	かんがへもの	十五	十九	花火	七十五
八	とけい	十八	二十	金のをの	七十八
九	うちの子ねこ	二十二	二十一	自動車	九十二
十	蛙	二十四	二十二	長い道	百
十一	國びき	三十	二十三	むしば	百二
十二	サ、舟	三十六	二十四	浦島太郎	百七

一 春が来た

春が来た

春が来た

どこに来た

山に来た

さどに来た

のにも来た

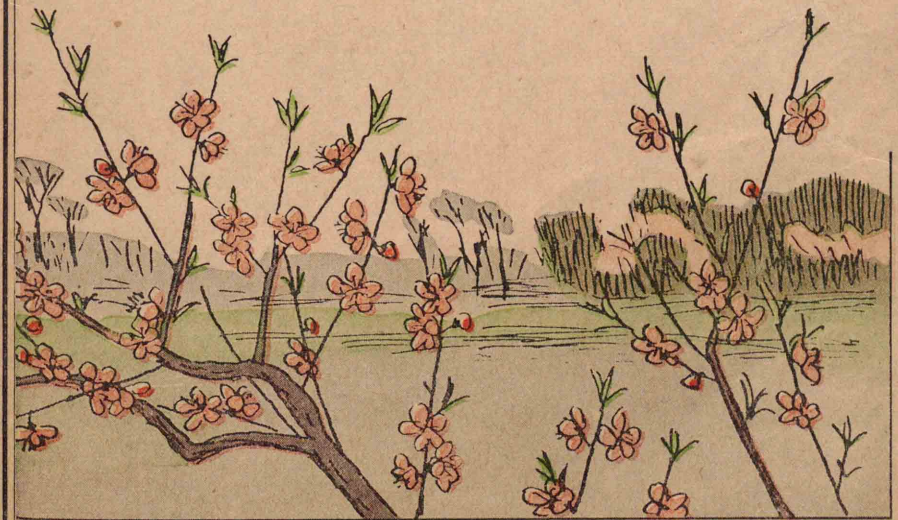


一 春が来た

尋國三

く

花がさく、
 花がさく、
 どこにさく。
 山にさく、
 さとにさく、
 のにもさく。



尋國三

なり
で

とりがなく、
 とりがなく、
 どこでなく。
 山でなく、
 さとでなく、
 のでもなく。



二なはとび

二なはとび

一だん、二だん、

なはとんだ、とんだ。

三だん とんだ、

四だん もとんだ。



尋國三

二なはとび

五だん のなはも、

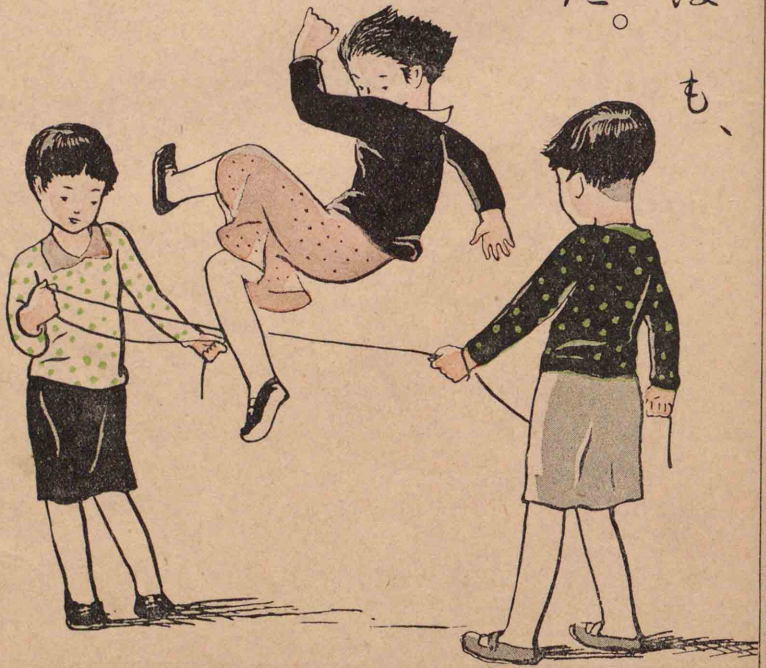
つづいて とんだ。

六だん、七だん、

八だん とんだ。

九だん、十だん、

なはとんだ、とんだ。



を まね ぴ ろよ す

おには 赤い。
に出すと、
よろこんで、
ぴよん ぴよん
はねます、
をどります。



三 うさぎ

七

お か ぎう

三 うさぎ
白い、
かはいい
うさぎさん。
お耳が
長い、
目が



三 うさぎ

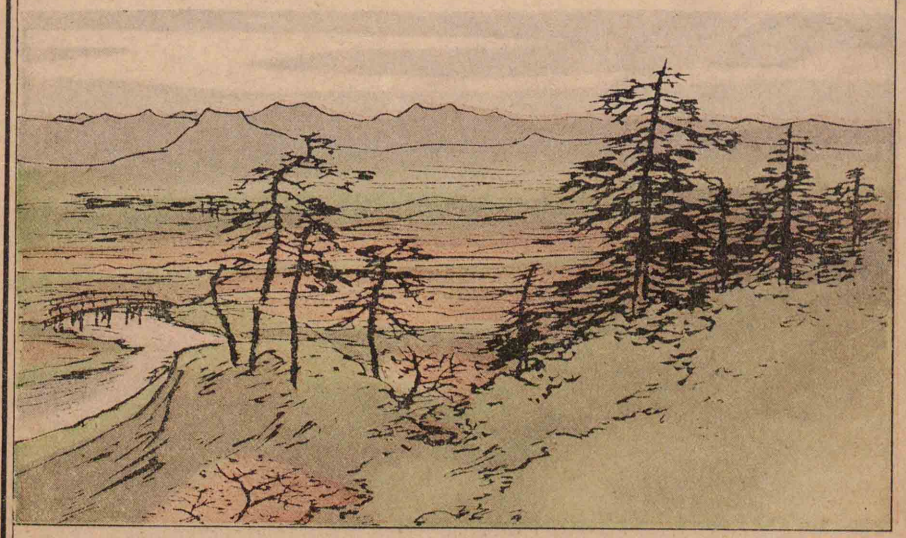
六

尋國三

四とび

ひ わ きる

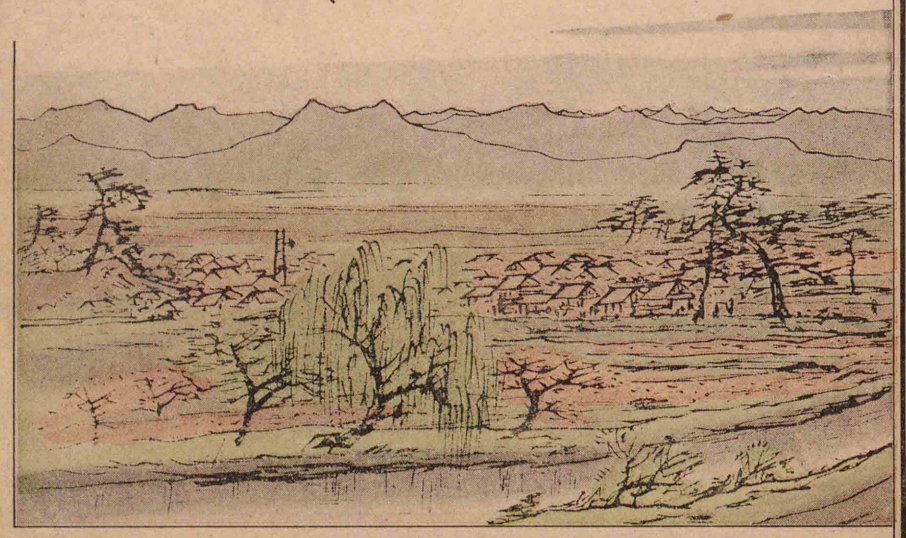
とびがなく、
春の空。
まるい、大きい
わを かいて、
ぴいひよら、ぴいひよら、
ぴいひよら。



尋國三

ち め

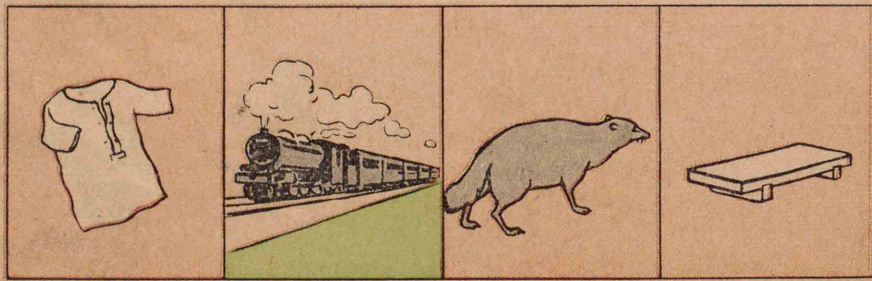
森の上でも、
ないてゐる。
まちの上でも、
ないてゐる。
ぴいひよら、ぴいひよら、
ぴいひよら。



ぬ 魚

ゆき子「山。」
 花子「まですね。」
 ゆき子「さうです。山ですから。」
 花子「まないた。」
 太郎「たぬき。」
 ゆき子「きしや。」
 花子「しやつ。」
 太郎「つくゑ。」

五 しりとり

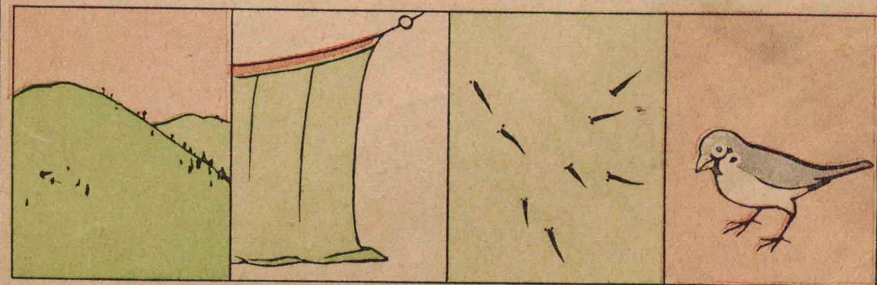


十一

し めじらゆ ず や

五 しりとり
 太郎「ゆき子さん から はじめて
 ください。」
 ゆき子「では、いひますよ。」
 すずめ。
 花子「めだか。」
 太郎「かや。」

五 しりとり



十

尋國三

ぱ

ゆき子「急はがき。」

花子「きつぱ。」

太郎「ふですか。」

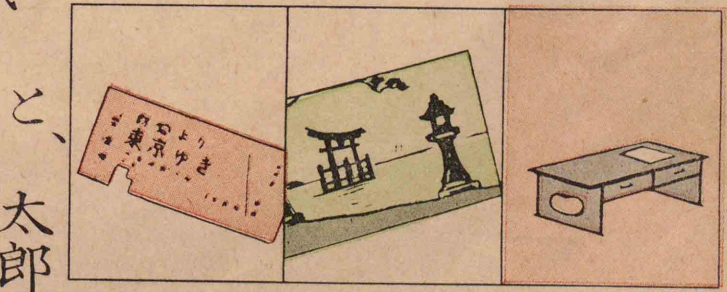
花子「さうです。」

太郎「ふはこまるな。」

ゆき子「早く、早く。」

花子「早く、早く。早く、つづけな」と、太郎

さんのまけですよ。」



け

六 ひよこ

おとうさんが、

「太郎、ひよこがかへったよ。」

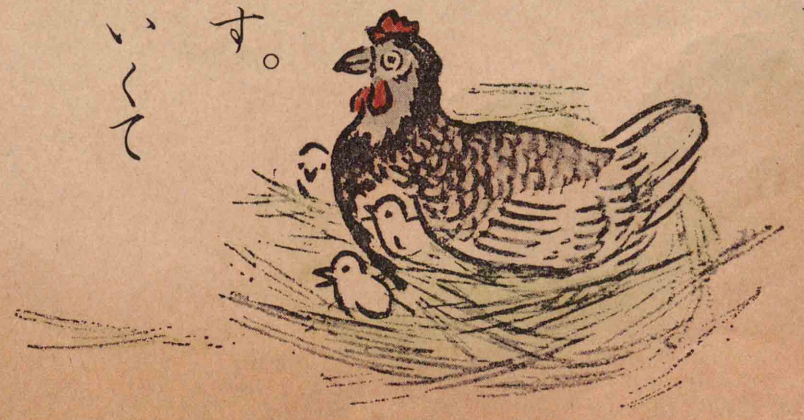
とおっしゃいました。

ぼくが見にいくと、ひよこが、おやどりのむねの所から、小さなあたまを出して、ぴよ、ぴよ、とないて

あむ ぼ

せ ば

ねます。はねの下にも、
 二三ばゐるやうです。
 ひよこがなくと、
 おやどりは、はなし
 でもするやうに、
 こ、こ、こ、こ、といひます。
 ぼくは、ひよこが
 かはいくて
 たまりません。



尋國三

ざふ そ ご

七 かんがへもの

「このはこの中に、おもしろい人
 がゐます。あててごらんなさい。」
 「そのはこをかしてください。」
 「はい。」
 「ふつてもようございますか。」
 「はい。」

七かんがへもの

え れ

「大そう かるう ございますね。この人は、どんな いろ の きものを きて きて みますか。」

「赤い きものを きて みます。」

「それでは、をんな でせう。」

「いいえ。」



尋國三

ほ げち

「それでは、をどこの子ですか。」

「いいえ。としよりです。」

「どうも こまりました。どんな かほを して みますか。」

「かほぢゆう ひげだらけです。」

「それでは、手も あしも ないでせう。」

「はい。」

「わかりました。だるまさんです。」

八とけい

ぼくのうちに、大きなぼんぼんどけい
 があります。あさからばんまで、「かつ
 ちん、かつちん。」とうごいてぬます。
 まいあさ、ぼくが目をさますころ、
 「ぼん、ぼん、ぼん、ぼん、ぼん、ぼん。」
 と、六つなります。学校へいく時や、

かへった時に、ぼくはきつととけい
 を見ます。おかあさんも、ときどきごら
 んになつて、

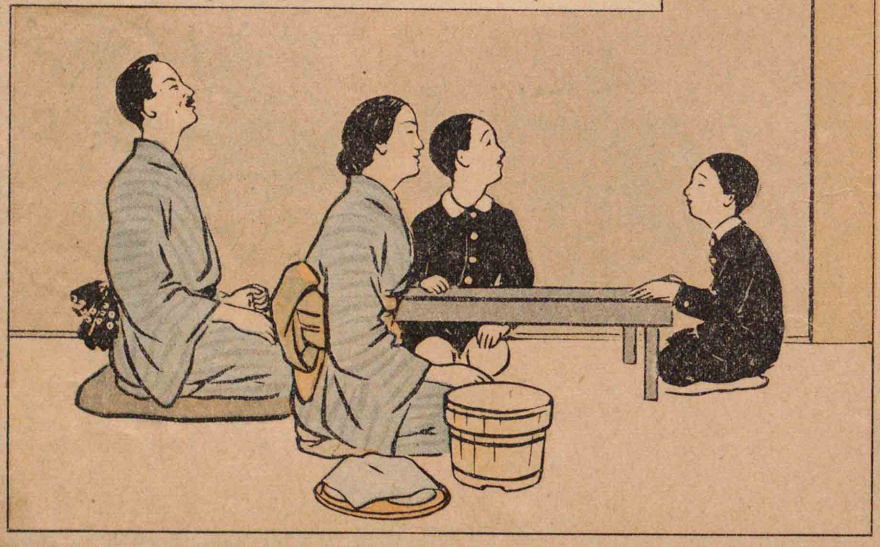
「そろそろ、ごはんのしたくをしませ
 う。」

などとおっしゃいます。

きのふ、ぼくが学校からかへつて來
 て、見ると、とけいがありません。おか

あさん に きくと、
 「ぐあひ が わるく なった から、とけい
 やへ なほし に やった のです。」
 と おっしやい ました。 「かつちん、かつちん。」
 と いふ 音が きこえない ので、なん
 と なく さびしい きが しました。
 けさ、ごはん の 時に、
 「もう 七時 かな。」

と いう
 て、に
 いさんが とけい を
 見ようと した ので、
 ぼくが わらひ 出しま
 すと、みんな が 大
 わらひ を しました。
 けれども、學校 に い

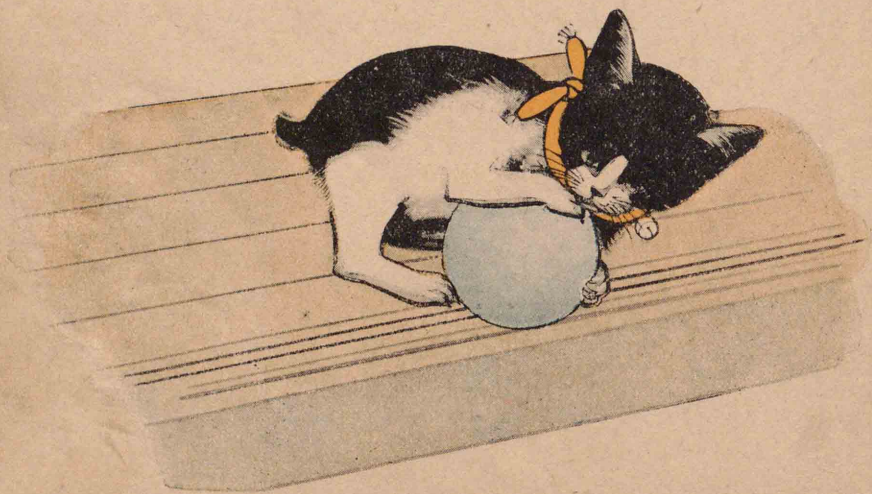


く時、ぼくも、ついとけいを見ようとしましたので、そばにおいでになったおかあさんが、おわらひになりました。

九 うちの子ねこ

うちの子ねこは、
かはい子ねこ。

くびの小すずを
ちりちりならし、
すそにからまり、
たもとにすがる。
うちの子ねこは、
かはい子ねこ。
くびの小すずを

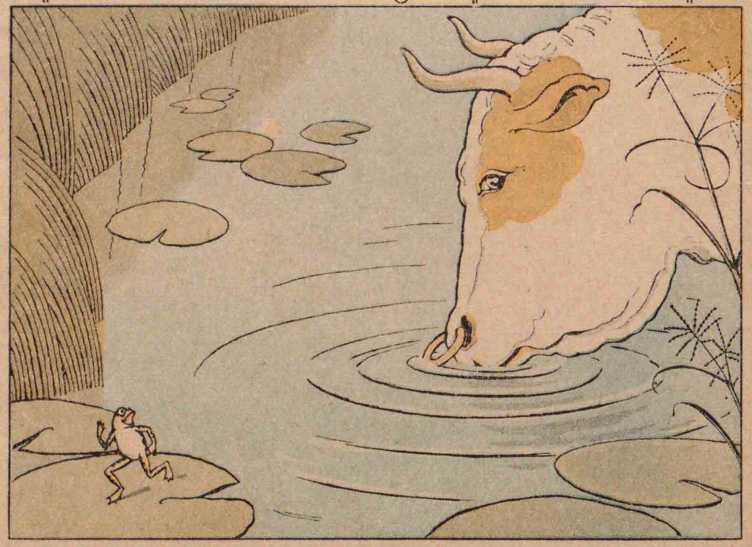


ちりちり ならし、
まりと じゃれて は、
えん から おちる。

十蛙

蛙 の 子ども が、川ばたで あそんで
あました。
そこへ 牛が 来て、水 を のみました。

子蛙 は、びっくりし
て、にげ出しました。
子蛙 は、あわてて う
ちへ かへりました。
さうして、おとうさん蛙
と おかあさん蛙 に、
「大きい、大きい ばけ
ものが、水 を のみに 来ましたよ。」



と いひました。

きんじよにゐた大蛙が、それをきいて、

「その大きなばけものは、わたしくらゐもあつたかね。」

と ききました。

子蛙は、

「どうして どうして。今まで見たこと

今

吸

もないほど大きいのです。

と こたへました。

大きいのがじまんの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらませて、

「そんなら、このくらゐもあつたかね。と いひました。子蛙はくびをふつて、」
「とてもそんなものではありません。」

と いひました。

「では、このくらゐかね。」

と いて、大蛙は、一そうおなかをふくらませました。

子蛙は、

「をぢさん、およしなさい。いくらおなかをふくらませても、かなひませんよ。」
と いひました。



しかし、大蛙は、こんどこそと、一生けんめいになつて、いきを吸ひこみました。おなかは、まるでふうせん玉のやうにふくれました。

すると、「ほん」と 大きい音がして、大

蛙のおながが、やぶれてしまひました。

十一國びき

大むかしのことです。

神さまが、どうかしてこの國をもつと
ひろくしたいと、おかんがへになりま
した。國をひろくするには、どこか
のあまった土地をもつて來て、つぎあ

ぶ 國 神 地土

はせたらよからうと、おかんがへにな
りました。

神さまは、うみの上を、ずっとお見
わたしになりました。すると、東の方
のとほい國に、あまった土地のある
のが見えました。

そこで、神さまは、その國に、太い、太
いつなをかけて、ありつたけの力を

東 太 力



出して、おひきになり
ました。

「こっちへ来い、

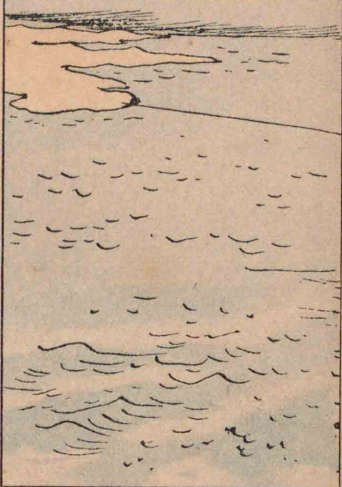
えんやらや。

こっちへ来い、

えんやらや。」

と、かけごゑいさましく
おひきになりますと、

舟



に、うみの上を、ぐんぐんとこっち
へやって来ました。

神さまは、その土地をこの國に
つぎあはせて、國をひろくなさいました。
しかし、まだせまいとおかながへに

西

なりました。

そこで、また うみの上をお見わたし
になりました。こんどは、西の方の
とほい 國に、やはり あまつた 土地の
あるの が 見えました。

神さまは、その 土地にも つなを か
けて、

「こっちへ 來い、

ば

えんやら や。

こっちへ 來い、

えんやら や。」

と、カ一ぱい おひき になりました。こ
れも、大きな 舟の やうに うごいて、
こっちへ やって 來ました。

神さまは、かうして にっぽん 日本 の 國を ひ
ろく なさった といふ ことです。

十二 サ、舟

太郎「正雄サン、サ、舟ヲナガシテアソビマセウ。」

正雄「ア、サウシマセウ。サ、舟ノキャウサウヲシマセウ。」

太郎「次郎チャンモ、ナカマニオハイリナサイ。ネエサンハ、シンバンキンニナツ

雄 次

三十七

人

テクダサイ。」

「ミヨ子」ハイ、ナリマセウ。」

三人ハ、メイくサ、ノハヲトツテ、舟ヲコシラヘマシタ。

「ミヨ子」サンハ、川下ノ土バシノ上ニ立チマシタ。

「ミヨ子」サア、私ガ、一、二、三、トイッたら、一シヨニ舟ヲ出スノデスヨ。

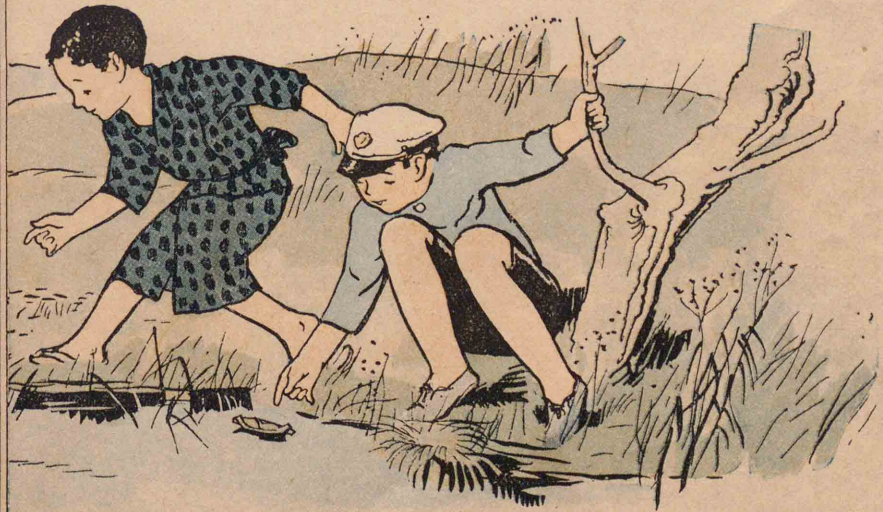
下土

一、二、三。

三人ハ、一ショニ舟ヲ出シマシタ。

舟ハ、土バシノ方ヘナガレテイキマス。

三人ハ、舟トナラシメ、川ノフチヲカケテイキマス。草ノ

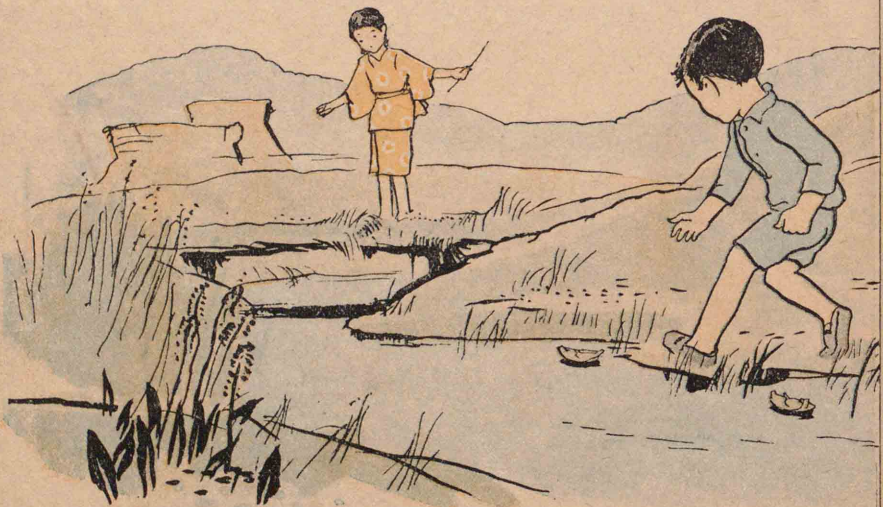


草

ハニトマツテキタテフクガ、トビ立ちマシタ。

ミヨ子「アラ、テフクガ、次郎チャンノ舟ニトマリマシタ。」

舟ハ、ダンク土バシヘ近クナリマス。



次郎「ホウラ、モウ チキ ショウブダ。」

ミヨ子サン ハ、

「一チャク、次郎チャン。」

ト、大キナ コエ デ イヒマシタ。

正雄「次郎チャン、バンザイ。」

太郎「次郎チャン、バンザイ。」

ミヨ子「次郎チャン ノ 舟 ニハ、テフクノ

セントウサンガ ノ ッタ カラ、カッタ ノ

「デセウ。」

十三 牛若丸 うしわかまる

月の よい ばん でした。

牛若丸 が、ふえ を 吹きながら あるいて

わました。

五でう の 橋 に 來ます と、

「まで。」

橋

男 用 べ 刀 千 本

と いふ もの が あり ます。
見 る と、大 な ぎ な た を も っ た、大 き な 男
が 立 っ て め ま す。

牛 若 丸 は、

「だ れ だ。なん の 用 か。」

と い ひ ま し た。

「べ ん け い だ。そ の 刀 が も ら ひ た い。
よ い 刀 を 千 本 あ つ め る つ も り で、

百 取

九 百 九 十 九 本 は 取 っ た。も う 一 本 で
千 本 だ。さ あ、刀 を 出 せ。」

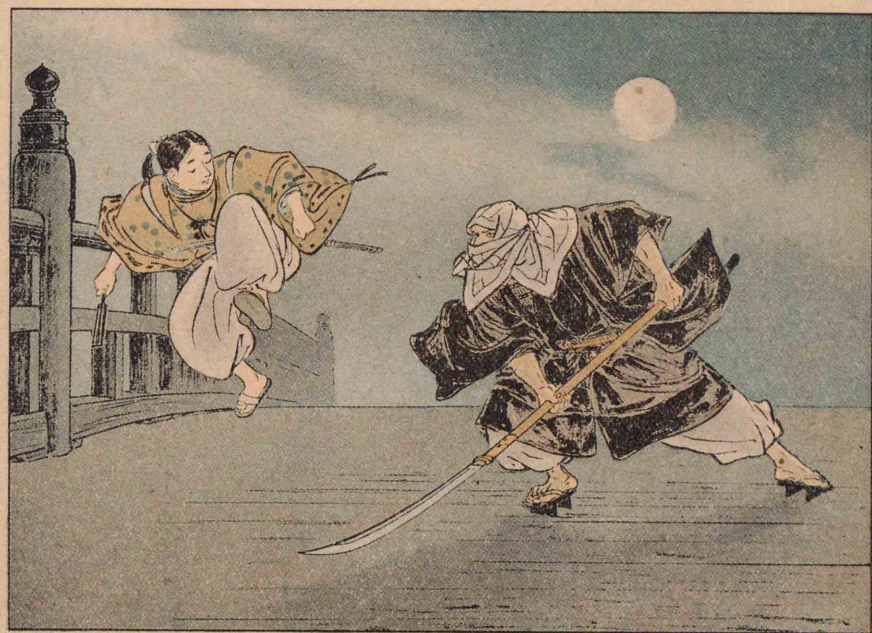
牛 若 丸 は、び く と も し ま せ ン。

「刀 が ほ し い か。ほ し け れ ば、取 っ て み
よ。」

と い ひ ま し た。

べ ん け い は、大 な ぎ な た を ふ り ま は し て、
き っ て か、り ま し た。

上 下



牛若丸は、ひらりとらんかんの
上にとび上りま
した。
べんけいが上
をきると、牛若
丸は下へと
び下ります。右を

尋國三

強

きれば、左へとびのき、左をきれば、
右へとびのきます。強いべんけいも、
だんくつかれて来ました。
牛若丸は、その時、あふぎでべんけい
のうでを強くたきました。べんけい
の大なきなたが、がらりとおちてしま
ひました。
とうく、べんけいはかうさんしました。

さうして、牛若丸のけらいになりました。

庭

延

十四 とんぼ

とんぼ、とんぼ。
庭のかきねに、
とんぼが一ぴき
とまった。



指

羽

ぐるりぐるり、
指でわをかくと、
ぎらりぎらり、
目玉が光る。

ちよつと羽を
つまゝうとしたら、



すいと、あつちへ
にげて いった。

十五 一寸ボフシ

オヂイサン ト オバアサン ガ アリマシタ。
子ドモ ガ ナイ ノデ、

「ドウゾ、子ドモヲ 一人 オサツケ 下サイ。
ト、神サマ ニ オネガヒ シマシタ。」

名

高

男ノ子 ガ 生マレマシタ。小指 グラキノ
大キサ デシタ。アンマリ 小サイ ノデ、一
寸ボフシ ト イフ 名ヲ ツケマシタ。
一寸ボフシ ハ、ニツ ニ ナツテ モ、三ツ
ニ ナツテ モ、少シモ 大キク ナリマセン。
オヂイサン ト オバアサン ハ、シンパイ
シテ、

「一寸ボフシノ セイガ、高ク ナリマス

毎 日

ヤウニ。

ト、毎日、神サマニオイノリシマシタ。
ケレドモ、ヤツパリ生マレタ時ノマ、
デシタ。

行 思

一寸ボフシハ、十三ニナリマシタ。アル
日、オヂイサントオバアサンニ、
「ミヤコへ行ッテ、エライ人ニナリ
タイト思ヒマス。少シノアヒダ、オ

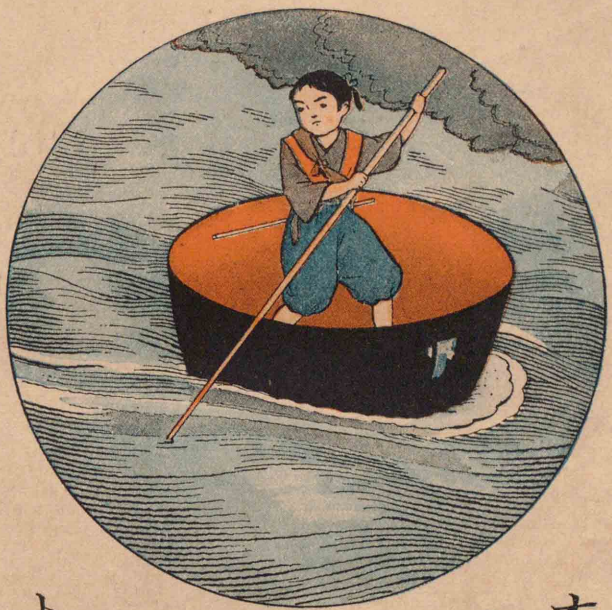
針

ヒマヲ下サイ。

トイヒマシタ。

一寸ボフシハ、オバアサンカラ、針ヲ
一本モラヒマシタ。ソレヲカニシテ、
ムギワラノサヤニ入レテ、コシニ
サシマシタ。ソレカラ、オワンヲモラッテ、
舟ニシマシタ。オハシヲモラッテ、カ
イニシマシタ。

キへ 行キマシタ。



一寸ボフシ ハ、オワンノ舟ニノツテ、
オハシノカイデ
ジャウズニコイデ、
大キナ川ヲノ
ボツテ 行キマシタ。
ミヤコニツクト、
トノサマノ オヤシ

マ

「ゴメン 下サイ。」

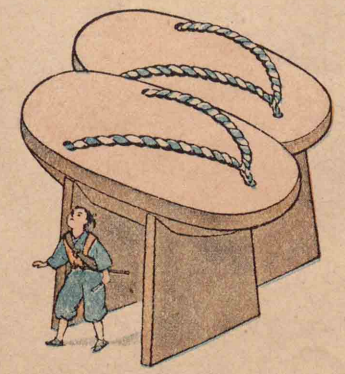
トイフト、トノサマガ 出テ オイデ
ニナリマシタ。ガ、ダレモ 弁マセン。

「ダレダラウ。」

トイッテ、方々 オサガシニナリマシタ。
「トコニ 弁ルノダラウ。」

トイッテ、庭ヲ 見マハシナガラ、アシダ
ヲオハキニナラウト シマシタ。スル

ト、ソノ アシダ ノ カゲ ニ 井タ 一寸
 ボフシ ハ、
 「アンデ ハ イケマセン」
 ト イツテ、アワテテ ト
 ビ出シマシタ。サウシテ、
 「ゲライ ニ シテ 下
 サイ」
 ト タノミマシタ。



三幸國三

遠

トノサマ ハ、
 「ゴレ ハ オモシロイ 子ダ」
 ト イツテ、ゲライ ニ ナサイマシタ。
 三年 バカリ スギマシタ。一寸ボフシ ハ、
 アル日、オヒメサマ ノ オトモ ヲ シテ、
 遠イ 所 へ 出カケマシタ。
 トチュウ マデ 來ル ト、ドコ カラ カ、オ
 ニガ 出テ 來テ、一寸ボフシ ヤ オヒメ

向

サマ ヲ タベヨウ ト シマシタ。
 一寸ボフシ ハ、針 ノ 刀 ヲ ナイテ、オ
 ニ ニ 向カヒマシタ ガ、トウク ツカマツ
 テ シマヒマシタ。
 オニ ハ、一寸ボフシ ヲ ツマンデ、一口
 ニ ノンデ シマヒマシタ。
 一寸ボフシ ハ、オニ ノ オナカ ノ 中
 ヲ、アチラ コチラ ト カケマハツテ、針

尋國三

ノ 刀 デ、チクリ チクリ
 ト ツ、キマシタ。オニ ハ、
 「イタイ、イタイ。」
 ト イヒマシタ。
 ソノウチ ニ、一寸
 ボフシ ハ、オナ
 カ ノ 中カラ
 ハヒ上ツテ、ハナ



地

ノ オク ヲ トホツテ、目ノ中へ出
 マシタ。サウシテ、針ノ刀デ目玉ヲ
 ツ、キマハツテ、ピヨコリト地メンへト
 ビ下リマシタ。
 オニハ、目ノ中ガイタクテナリマ
 セン。目ヲオサヘテ、一生ケンメイニ
 ニゲテ行キマシタ。ウチデノコヅチモ、ワ
 スレテニゲテ行キマシタ。

尋國三

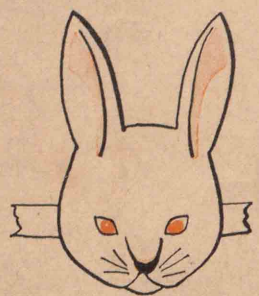
オニノワスレタウチデノコヅチヲ見
 ルト、オヒメサマハ、
 「コレハヨイモノガアル。
 トイッテ、大ソウヨロコビマシタ。コレヲ
 フルト、ナンデモジブンノ思フト
 ホリニナルカラデス。ソコデ、
 「一寸ボフシノセイガ、高クナルヤ
 ウニ。」

ト イツテ、オヒメサマ ハ、サツソク ウチデ
 ノコヅチ ヲ フリマシタ。
 一寸ボフシ ノ セイガ、少シ 高ク ナリ
 マシタ。
 「モット 高ク ナレ、モット 高ク ナレ。
 ト イヒナガラ、ナンベン モ フリマシタ。
 一寸ボフシ ハ、ダレ ニモ マケナイ 大男
 ニ ナリマシタ。

良 作

十六 かちく山

良雄さんと 太郎さんは、ぐわようしで
 めん を 作って あそぼうと、さうだんし
 ました。



良雄さんは、ぐわようしに
 うさぎ の かほ を かきま
 した。耳 を 長く かきまし

た。目玉を赤くぬりました。
太郎さんは、それを見て、



「ほくはたぬきにしよう。」

と、いって、たぬきのかほをかきました。はなのりやうわきから耳へかけて、茶色にぬりました。二人は、はさみでゑを切りぬいて、

茶色二人切

細合

君

めんをこしらへました。さうして、べつのごわようしを細長く切って、それをじぶんたちのあたまに合ふやうに、わに作って、めんにつけました。二人は、めんをつけてみました。よくにあひました。

太郎「君、ちちく山ごっこをしようよ。」
良雄「い、な、しよう。」

紙

それから、二人は、舟をこしらへるさうだんをしました。

舟は、あついで二つこしらへました。さうして、長いひもをつけて、くびへかけますと、舟はおなかのへんにかゝつてゐます。

良雄「うまい、うまい。うまくできました。さあ、ぼくはうさぎ、君はたぬきだよ。」

學園三

氣君

太郎「ぼくがたぬきか。よし、やらう。」

うさぎの良雄さんは、少しかんがへてから、いひ出しました。

うさぎ「たぬき君、よいお天氣だね。これから、一しよに舟あそびをしよう。」

たぬき「よからう。」

うさぎとたぬきは、舟をこぐまねをしました。

うさぎ は うたいまし
た。

うさぎ「うさぎの舟は

木舟、

たぬきの舟は

どろ舟。」

そのうちに、たぬき

の舟が少しおく



れました。

たぬき「おうい、うさぎ君、ぼくの舟は、なん

だか おもくて すまない やうだ。」

うさぎ「そんなことはないよ。君のこ

ぐの がへたなの だ。」

たぬき「さうか ね。」

また しばらく ころしました。たぬきは、だ
んだん おくれて 来ました。

助

「たぬき」やあ、大へん、大へん。ぼくの舟に
 水がはいって来た。あ、舟がしづむ、
 しづむ。うさぎ君、助けてくれ。」
 いつのまにか、となりのへやに、
 良雄さんのおかあさんとねえさんが
 来て、見ていらっしやいました。
 良雄さんも太郎さんも、気がついて、
 あわててやめました。おかあさんは、

何 年

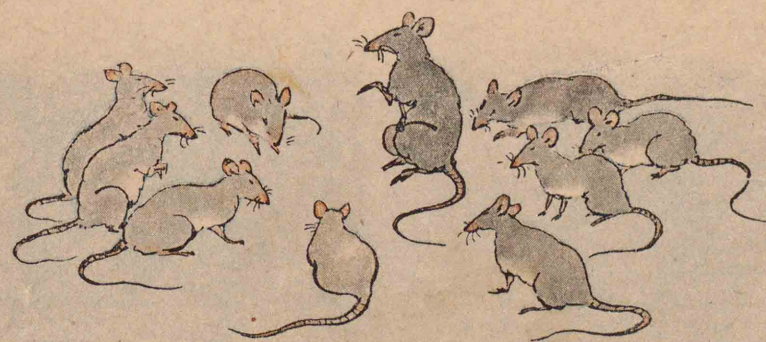
「まあ、ほんたうにじゃうずです」ね。
 と、いって、おほめになりました。

十七 ねずみのちゑ

「このごろ、なかまのものが、ねこに
 とられてこまるが、何かよいくふ
 うはあるまいか。」
 と、年とったねずみが、なかまのもの

首

にいひました。
 その時、一ぴきの子
 ねずみが、前へ出て
 いひました。
 「よいくふうが
 あります。大きな
 ねこの首につけ
 ておいて、その音



がきこえたら、にげることにして
 はどうでせう。
 「なるほど、よいかんがへだ。
 と、いって、みんなかんしん
 すると、年とったねずみが、
 「それもよいが、だれが、その
 すいをつけに行くのか。
 と、いひましたので、みんな
 だまってし

まいりました。

十八 キングヨ

目ガ サメマシタ。

ユフベ 買ッテ イタゞイタ キングヨ ノ コ

トヲ 思フ ト、ジツト シテ ハ 牛ラレ

マセン。

私 ハ トビオキマシタ。 サウシテ、スグ エ

持

ンガハ ニ 出テ、バケツ ノ 中ヲ ノゾ
キマシタ。 カゾヘテ ミル ト、ヤツパリ 五
ヒキ 牛マシタ。 ミシナ キレイナ、カハイ、
キングヨ デス。

オカアサン ガ、ガラス ノ キングヨバチ ヲ
持ッテ 來テ、

「ゴレ ニ 入レテ オヤリ ナサイ。」

ト オツシャイマシタ ノデ、私 ハ、スグ キ

急
 ンギョ ヲ キンギョバ
 チヘ ウツシテ ヤ
 リマシタ。
 キンギョ ハ、前ヨリ
 モ、ズット キレイニ
 見えマス。ヨコノ方
 カラ ノゾク ト、キ
 ンギョガ、急ニ大



キク 見えタリ、マタ モトノヤウニ、
 小サク 見えタリ シマス。
 ユフベカラ 何モ ヤラナイカラ、オナ
 カガ スイテ 弁ルダラウト 思ッテ、私
 ハ オカアサン ニ、フヲ モラッテ 來テ
 ヤリマシタ。

十九 花火

星 度

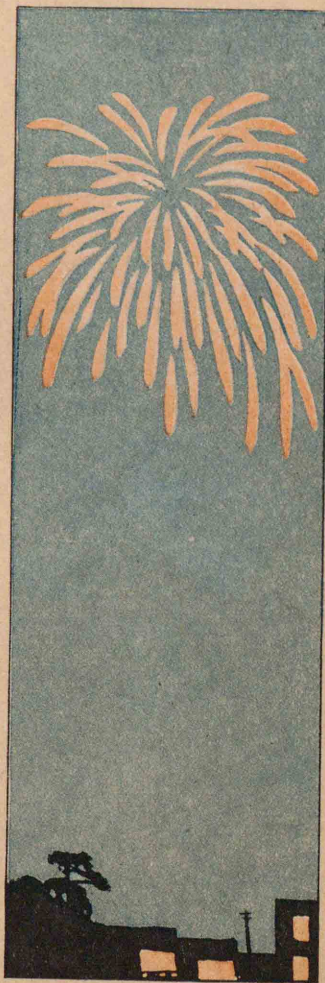
しだれやなぎが
ひろがった。
どんと なった。
何十、何百、
赤い星、
一度にかはって
青い星、

十九花火

七十七

神國三
神國三

どんと なった。
花火だ、
きれいだ。
空一ぱいに
ひろがった、



十九花火

七十六

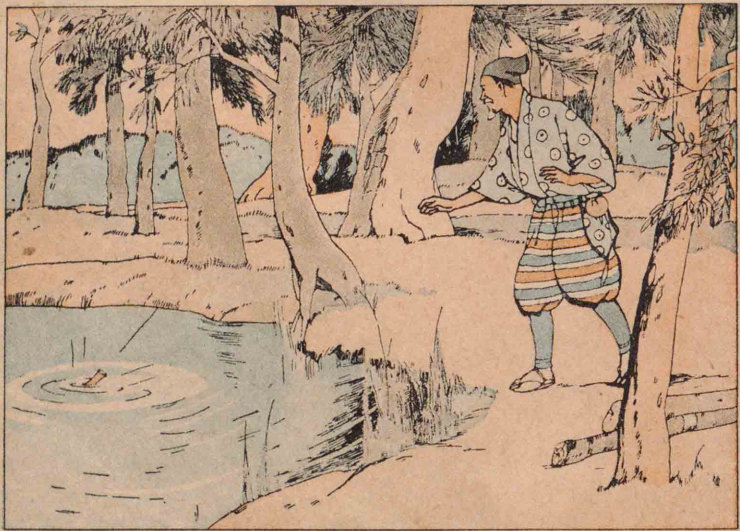
も一度かはって
金の星。

二十金のものを

木こりが、池のそばの森で、木
をきってぬました。をのに力を入
れて、こん、こん、ときってぬました。
あんまり力を入れすぎたので、をの

深 落

が、手からはなれて、とんで行きました。
「あつ。」と思ふまに、
をのは、深い池の
中へ、どぶんと落ち
てしまいました。
「あ、しまった。」
と、木こりは、思はず
大きなこゑを出し



生 聞

ました。さうして、まっさをな水の上を
 じっと見ながら、「どうしたらよからう。」と
 かんがへこんでゐました。
 すると、その水の中から、まっ白な長
 いひげの生えたおぢいさんが、出て
 来ました。さうして、
 「どうしたのだ。」
 と聞きました。

消

木こりは、
 「池の中へ、をのを落してしまひ
 ました。」
 とこたへました。
 「それはかはいさうだ。わたしがひ
 ろってやらう。」
 かういふと、おぢいさんのすがたは、
 すぐ、水の中に消えて、見えなくな

美

りました。

しばらくすると、おぢいさんが出て
来ました。その手には、美しい金の
をのが、きらくと光ってゐました。

「お前の落したのは、これだらう。」

「いえ、ちがひます。それでは、ごさいま
せん。」

「では、もう一度さがしてみよう。」

銀 今

おぢいさんのすがたは、また水の中
に消えました。さうして、今度は美しい
銀のものを持って、出て来ました。

「では、このものをか。」

「いえ、それでもごさいません。てつ
のをのでごさいます。」

「さうか。では、もう一度さがしてみ
よう。」

おぢいさんのすがたは、また水の中に消えました。

おぢいさんは、今度こそ、木こりの落したてつのをのを持って、出て来ました。

「これだらう。」

「はい、それでございます。どうもありがとうございました。」

受

木こりは、そののを受取って、何べんもおれいをいひました。おぢいさんは、

直

「お前は、ほんたうに正直な男だ。この二つののを、お前にあげよう。」



近所話若

と、いひながら、金のものをと、銀のものを木こりにやりました。木こりは、ふしぎなおぢいさんから、金のものと、銀のものをもらったことを、近所の人に話しました。となり、若い男も、木こりでした。それを聞くと、じぶんも金のものをや、銀のものがほしくなりまし

た。

若い男は、池のそばの森へ行きました。をので、こん、こん、と木をきりはじめました。

そのうちに、若い男は、わざと、をの手からはなしました。をのは、どぶんと池の中へ落ちました。

「あ、しまった。」

と、若い男は、できるだけ大きなこ
 ぶでさけんで、水の上を見てみ
 ました。
 青い水の中から、おぢいさんが出
 て来ました。さうして、
 「どうしたのだ。」
 と聞きました。
 「池の中へ、をのを落してしまひ

ました。」

と、若い男はこたへました。

「それはかはいさうだ。わたしがひ
 ろってやらう。」

かういふと、おぢいさんのすがたは、
 すぐ、水の中に消えて、見えなくな
 りました。

若い男は、金のものをのことばか

り かんがへて、まってゐました。
 しばらくすると、水の中から、おぢ
 いさんが 出て 来ました。その 手 には、
 美しい 金 の ものを、きらりと 光つ
 て ゐました。

「お前の 落した の は、これ だらう。」
 若い 男 は、すぐ、
 「はい、それで ございます。」

と、いって しまいました。
 すると、今 まで やさしさうに 見えて
 ゐた おぢいさん の かほが、急に き
 つく になりました。さうして、

「お前 の や
 うな うそつ
 き には、金
 の をの も、



銀のをもやることはできない。と
いって、すぐ、水の中に消えてしま
ひました。

二十一 自動車

オヒルカラ、私ハ、正雄サンノウチ
ヘアソビニ行カウト思ッテ、外へ
出マシタ。

自動車

止

トチュウマデ來テ、フト見ルト、チャウ
ド正雄サンノウチノ前ニ、自動車
ガ止ッテキマシタ。ソバニ、人が四五
人ヨッテキマシタ。

急

「何ダラウ。」ト思ッテ、私ハ急イテ行ッ
テ見マシタ。正雄サンガキマシタノデ、
「何デス。」

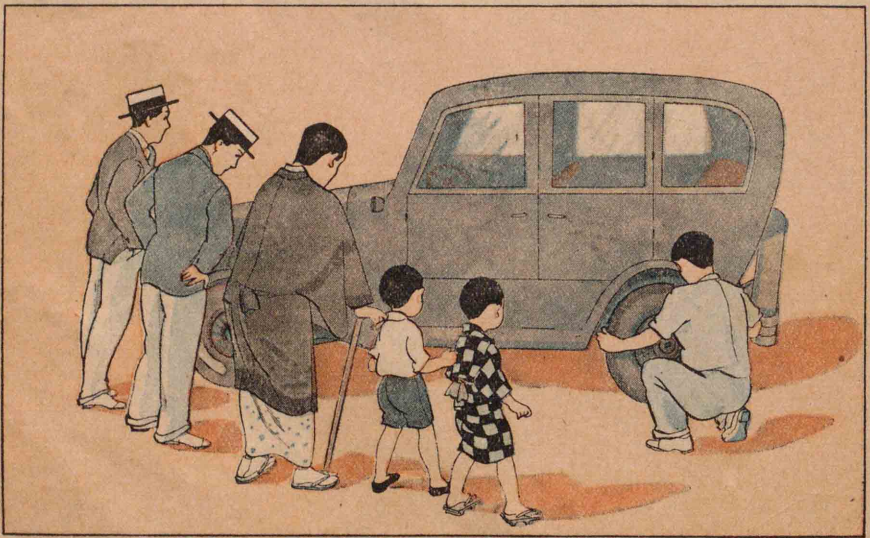
ト聞キマスト、正雄サンハ、

知

「自動車ノコシヤウデス。」
 トイヒマシタ。
 「ドンナコシヤウデス。」
 ト聞キマシタガ、正雄サンモヨクワ
 カラナイト見エテ、ダマツテキマシタ。
 ソノ自動車ニノツテ來タラシイ、三人
 ノ知ラナイヲヂサンガ、立ツテキマシタ。
 ソノ中ノ一人ガ、

三國三

「アノ左ガハノウ
 シロノ車ヲゴ
 ランナサイ。」
 トイヒマシタ。見ル
 ト、ソノ車ヲ、今
 ウンテンシユガ一生
 ケンメイニナツテ、ハ
 ツサウトシテキル



トコロ デス。車 ハ、タイヤガ ヒシャゲテ
キマシタ。

「タイヤガ ヒシャゲテ キマス ネ。」

ト イヒマス ト、ヲヂサン ハ、

「アノ タイヤノ 中ニ、モウ 一ツゴ
ムノクダガ アルノ デス。」

ト イヒマシタ。私 ハ、オトウサンノ ジ
テン車ガ、サウ ナツテ キル コトヲ 思

空 間 別

ヒ出シマシタ。

「ソノクダガ ヤブレテ、中ノ 空
氣ガ、ヌケテ シマッタノ デス。」

ヲヂサンガカウ イッテ キル 間ニ、ウ
ンテンシユ ハ車ヲ ハヅシマシタ。サウシ
テ、自動車ノ ウシロニ ツケテ アツタ、
別ノ車ヲ 持ッテ 來テ、トリツケマシタ。
スツカリ シゴトガ スム ト、ウンテンシユ

ハ、ヲヂサンタチ ニ、
 「サア、ドウゾ。オマチドホサマ デシタ。」
 ト イヒマシタ。ヲヂサンタチ 三人 ハ、
 「ヤア、ゴクラウ デシタ。」
 ト イツテ、自動車 ニ ノリマシタ。
 ウンテンシユ モ ノリマシタ。
 「ブルく、ブルく。」
 ト、自動車 ガ ウナリ出シマシタ。

走 動

ヲヂサンタチ ハ、私タチ ニ、
 「サヤウナラ。」
 ト イヒマシタ。私 モ、正雄サン モ、
 「サヤウナラ。」
 ト イヒマシタ。
 自動車 ハ 動キ出シマシタ。
 「ブツ ブウ。」
 自動車 ハ 走ツテ 行キマス。

道

二十二長い道

私たちハ、自動車が見エナクナルマ
デ、立ッテ見テキマシタ。

二十二長い道



尋國三
尋國三

百

夕

どこまで行っても、
長い道。

夕日が赤い、
森の上。

どこまで行っても、
長い道。
ごうんとお寺の

二十二長い道

百一

かねがなる。

どこまで行っても、

長い道。

もうかへらうよ、

日がくれる。

二十三むしば

朝

花子さんは、はがいたいので、一ばん
ぢゆうくるしみました。

朝になっても、まだいたいのがな
ほりません。花子さんは、おかあさんと
一しよには、のおいしゃさまへ行きま
した。

おいしゃさまは、すぐ見て下さいました。
「やあ、二本ならんでむしばができて

洗

ある。おくわしをたべすぎましたね。」
 といつて、くすりで洗ったり、くすりを
 つけたりして下さいました。
 花子さんは、いたいのが少しなほつ
 たやうに思ひました。
 おいしやさまは、おかあさんに、
 「この、前の方のむしばは、生えか
 はるはですが、おくの方のは、

尋國三

使

一生使ふ大じなはです。それが、
 かうむしばになつ
 ては、いけません
 ね。」
 とおっしゃいました。さ
 うして、花子さんに、
 「花子さん、あなたは
 はをみがきます



答 夜

か。
 と、お聞きになりました。
 「毎朝 みがきます。」
 と、花子さんは答へました。おいしやさま
 は、
 「夜ねる前にも、みがくといいで
 すかね。さうすると、こんな
 はがわるくならないでせう。」

寺國三

忘

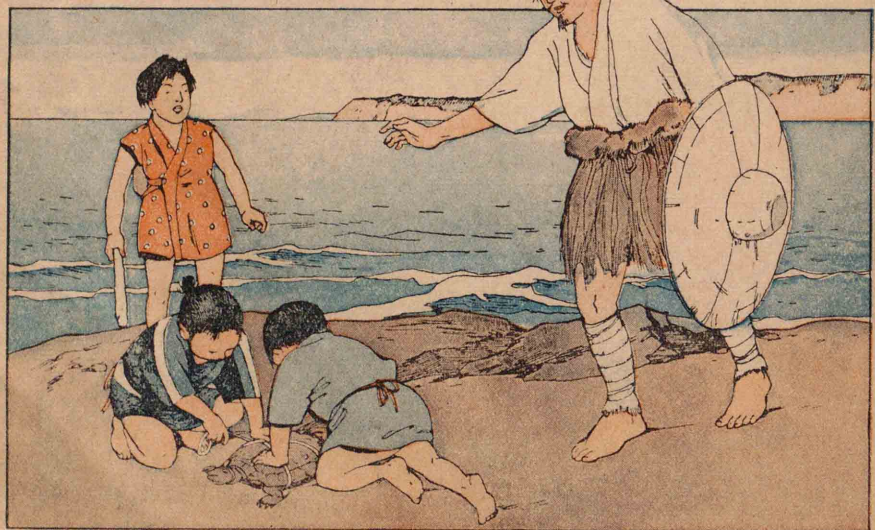
とおっしゃいました。花子さんはうなづき
 ました。
 おかあさんと一しよに、おいしやさまの
 おうちを出た時、花子さんは、もう
 はのいたみを忘れて、にこくして
 りました。

二十四 浦島太郎 うらしま

むかし、浦島太郎といふ人がありま
した。

ある日、はまべを通つてゐると、子ども
が大ぜい集つて、何かさわいでゐま
した。見ると、かめを一びきつかまへ
て、ころがしたり、たいたりして、いぢめ
てゐるのです。浦島は、
「そんなかはいさうなことをするも

の ではないよ。
と いひますと、
子どもらは、
「何、かまふもの
か、ぼくたちがつ
かまへたのだから、
と、いって、なかく聞
きません。浦島は、



賣

「それなら、をぢさんにそのかめを
賣っておくれ。」

と、いって、かめを買取りました。

浦島は、かめのせなかをなでながら、

「もう二度とつかまるなよ。」

海

と、いって、海へはなしてやりました。

それから二三日のちのことでした。

浦島が、舟にのって、いつもの通り

呼

つりをしてゐると、

「浦島さん、浦島さん。」

と、呼ぶものがあります。だれだらう

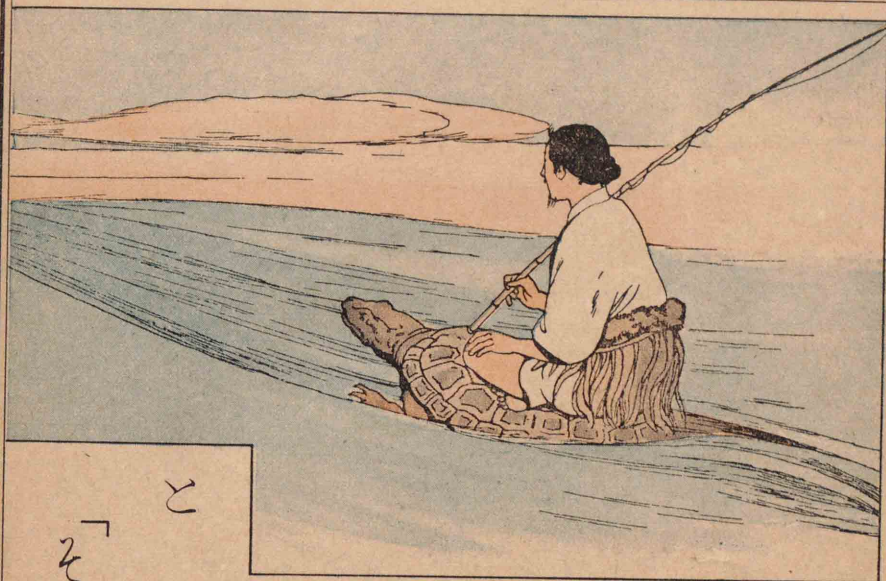
と、思って、ふりかへって見ると、大きな

かめが、舟のそばへおよいで来て、

ぴよこりとおしぎをしました。さうして、

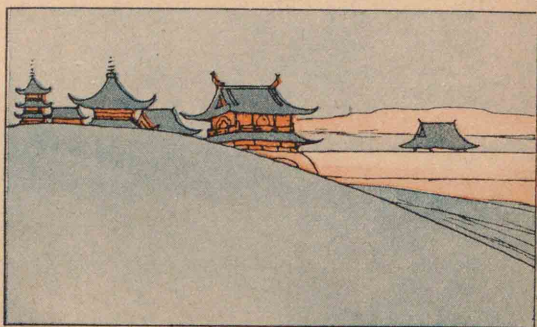
「この間は、ありがたうございました。私

は、あの時助けていただき、いたかめ



です。けふはお
れいに、りゅうぐ
うへおつれし
ませう。さあ、私
のせなかへお
のり下さい。」
と、いひました。浦島は、
「それはありがたう。」

門黄



と、いって、かめのせなかに
のりました。かめは、だんく
海の中へは、いって、行き
ました。
しばらく行くと、向かふに
赤や、青や、黄でぬった、りっぱな門
が見えます。かめが、
「浦島さん、あれがりゅうぐうの門

間

です。

と いひました。

間もなく ごてんへ つきました。たいや、
ひらめなどが、むかへに出て来て、
おくの、りっはな ごてんへ 通しました。
美しい 玉や 貝で かざった、その じ
てんは、目も まぶしい ほど きれい
です。そこへ、おとひめさまが 出てい

貝

ぞ

らっしやいました。さ
うして、

「この間は、かめ
を助けて下さっ
て、ありがたう
ございます。どう
ぞ、ゆっくりあ
そんで 行って 下



さい。

と、いって、いろいろごちそうをして下さいました。たいや、ひらめや、たこなどが、大ぜいで、おもしろいをどりをどりました。

家

浦島は、あまりおもしろいので、家へかへるのも忘れて、毎日毎日、たのしくくらし、おもしろい。しかし、そのうち

に、おとうさんやおかあさんのことをかんがへると、家へかへりたくありません。そこで、ある日、おとひめさまに、「どうも長くおせわになりました。あまり長くなりますから、これでおとまをいただきます。」
とおとひめさまは、しきりに止めました

箱

が、浦島が どうしても 聞きません の
で、

「それでは、この 玉手箱 を あげます。
しかし、どんな ことが あっても、ふ
たを あけて は なりません。」

と 言って、きれいな 箱 を おわたしに
なりました。

浦島は、玉手箱たまてばこをかへ、かめに のつ

住 死

て 海の上へ 出ました。

もとの はまべへ かへって 來ますと、
おどろきました。村の やうすは、すつか
りか はって めます。住んで めた家も
なく、おとうさんも、おかあさんも 死ん
で しまつて、知った人は、一人も をり
ません。これは どうした ことか と、
浦島は、箱をかへながら、ゆめの

歩

やうに、あちらこちらと歩きまはりま
した。

こんな時に玉手箱をあけたら、どう
かなるかも知れ

ないと思っ

て、おとひめ

さまの、いっ

たことも



尋國三

忘れて、そのふたをあけました。すると、
中から、白いけむりがすうと立ちの
ぼりました。それがかほにかつたか
と思ふと、浦島は、かみも、ひげも、
一度にまっ白になって、しわだらけの
おぢいさんになってしまいました。

は	ば	だ	ざ	が	ん	わ	ら
び	び	ぢ	じ	ぎ		ゐ	り
ぶ	ぶ	づ	ず	ぐ		う	る
べ	べ	で	ぜ	げ		ゑ	れ
ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご		を	る

も	み	さ	こ	や	ゐ
せ	し	き	え	ま	の
す	そ	ゆ	て	け	お
ん	ひ	め	あ	ふ	く

や	ま	は	な	た	さ	か	あ
い	み	ひ	に	ち	し	き	い
ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
え	め	へ	ね	て	せ	け	え
よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

な	れ	わ	り	ほ	い
ら	そ	か	ぬ	へ	ろ
む	つ	よ	る	と	は
う	ね	た	を	ち	に

蛙今吸國神地東力舟西雄次草近
 橋男用刀千本百取強庭指羽寸名
 高每行思針遠向良作茶色切細合
 君紙氣助何首買持急星度金池深
 落聞消美銀受直話若自動止知間
 別走道夕朝洗使答夜忘通集賣海
 呼黃門貝家箱住死步

をはり

尋國三

昭和十年十月十五日修正印刷
 昭和十年十月十八日修正發行
 昭和十年十月十九日翻刻印刷
 昭和十年十二月二十九日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

定價金拾參錢

小學國語讀本尋常科用卷三

昭和十年十月十九日
 文部省檢査濟

發行所

大阪書籍株式會社

翻刻發行
兼印刷者

大阪書籍株式會社

代表者 三木佐助

大阪市西成區津守町五百九十六番地ノ四

印刷所

大阪書籍株式會社工場

第二學年
須磨

文庫

35

865

広島大学図書

2000301865

